

加曽利南貝塚における貝塚形成過程と集落展開

— 環状貝塚の形成と谷奥型環状遺丘集落の構造 —

阿 部 芳 郎

要旨

加曽利北貝塚と南貝塚はそれぞれ中期と後期を代表する東京湾東岸の巨大貝塚である。小論では北貝塚と南貝塚の貝層の堆積構造の比較を行い、北貝塚が竪穴住居の廃絶後に貝塚が形成され、やがて貝層がマウンド状の高まりを形成するのに対して、南貝塚では貝層中に土砂の敷設や、貝層の削平がおこなわれた面に炉跡が形成され、貝層の累積だけではなく、同じ場所に重複して集落遺構が形成されている状況を指摘した。両貝塚の違いは単に時期の違いだけではなく、遺跡形成の構造的な差異が反映したものである。

そして南貝塚における後期中葉以降の貝層と生活面の形成は、環状を意識した集落遺構を示すもので、固定的な空間内で連続した居住活動が累積した結果、環状の高まりが形成されたものと考えられた。これまで当該期の集落遺跡で後期後半から晩期にかけて住居の検出例が激減するという認識は、人為的に堆積させた貝層や黒色土（注1）の上に、掘り込みの浅い、または平地式の住居が構築され、それが発掘で容易に検出することが困難であったことに因る。

さらに南貝塚で認められた活動の累積的な形態とマウンド状の高まりの形成過程は、谷奥型環状遺丘集落（阿部2004a）と共通した構造もつことを指摘した。

キーワード：縄文時代後・晩期、加曽利南貝塚、環状盛土遺構、谷奥型環状遺丘集落

はじめに

加曽利貝塚は東京湾沿岸に群集して分布する中後期の巨大環状貝塚の1つである。貝塚は北と南の二つから成り、それらは一部で連結して、あたかも眼鏡状を呈している。加曽利貝塚はその形態的な特徴から、縄文時代集落研究のなかで環状を呈する集落に貝塚が付随して形成されたものと考えられてきた。

たしかに出土した土器を見ると阿玉台Ⅰb式から安行Ⅲb式までがほぼ間断なく出土しており、きわめて長期的間、この場所に生活の痕跡が残されたことを窺わせる。こうした長期にわたる生活の累積が規模の大きい貝塚の形成にかかわるという認識は、一見整合的な説明に見える。しかし、長年この遺跡の調査にたずさわった後藤和民氏は、住居跡が環状の貝塚の外側にまで広く展開する事実を指摘して、環状貝塚の内側に集落が形成されたと考える「貝塚内集落説」を批判して、集落の内部に貝塚が形成された「集落内貝塚論」を提唱した（後藤1980）。

結果的に後藤氏の考えは国史跡の指定範囲を広げるとともに、発掘によって得られた事実に対して柔軟な解釈の一つであった。ところが、これまでの発掘調査の成果を良く調べてみると、環状貝塚の周辺にその展開が予測される住居群の時期は、中期後葉から後期初頭の時期が大半であり、後期後葉から晩期の遺構や遺物が出土する地点は、広大な遺跡範囲のなかで貝層とその内側部分の極めて狭い範囲だけに限定されていたことをも明らかにしたのである（注2）。

さらに後期の環状貝塚として著名な南貝塚は、晩期中葉までの遺物を出土しているが、晩期前葉の安行3b式期の1軒を最後に堅穴住居跡がない。これを将来の発見に求めることも可能であろうが、近年の後晩期集落の大規模調査においても、多くの遺跡で加曽利B式期以降の住居数が激減する傾向が広い地域で確認されるのは後晩期の集落研究上で看過できない事実である。

そこでまず小論では2つの観点から加曽利南貝塚における後晩期集落の形成を考えてみたい。まず1つ目は、中期の北貝塚と後期の南貝塚の貝塚形成の比較をおこない、これまで同一視されてきた2つの環状貝塚の成り立ちの本質的な違いについて考える。そして南貝塚で指摘できた特徴について、後晩期集落形成の構造的な特質として理解を試みようと思う。

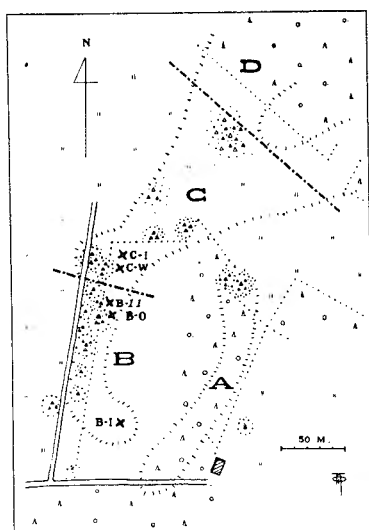
1 環状貝塚の認識と堆積構造

加曽利貝塚の貝層部分が土手状の盛り上がりを示して、それが眼鏡状の平面形態をしていることを測量調査によって初めて示したのは大山 柏である（第1図A）。大山はそれだけではなく、南貝塚の複数地点の発掘調査をおこない、各地点の状況について実に細かな所見をまとめている（大山1936）。

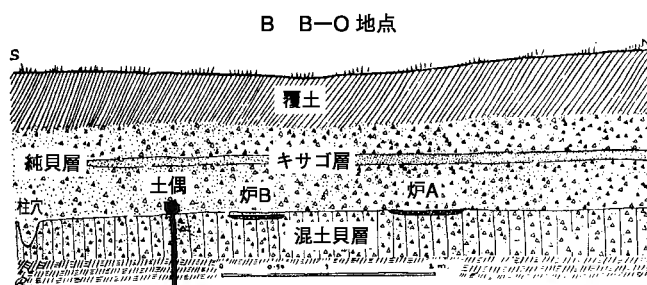
大山は土手状にめぐる貝塚を「堆積堤」と呼称し、本貝塚の外観上の特徴として指摘した。そして貝塚の調査所見から、貝層が単なる廃棄行為の連続だけではなく、層中に炉跡や柱穴、埋葬人骨など、さまざまな生活面が累積したものであることを指摘している。ここで大山らの調査した地点の概要をまとめておこう（第1図）。

B-0地点の発掘では後期の貝層中に2箇所の炉址と柱穴らしい掘り込みを1個確認しており、「若干時貝塚生活を営んだ後に、其貝塚上にAB炉の如き住居を営み、更にこのAB等の後に何処かへ住居して、純貝層をなす貝類を投棄したものが見らるる」として貝層中に住居址が存在したことを指摘した。この2箇所の炉の周辺から出土したのは、2点の山形土偶であった（第1図B）。

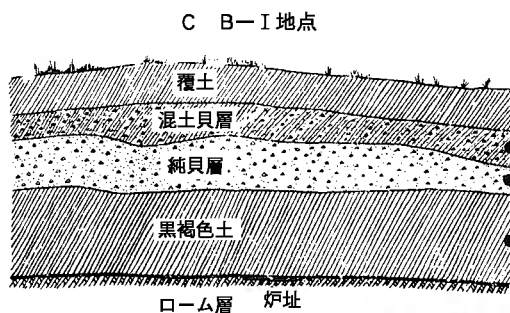
B-I地点の層位と出土遺物を整理してみると、第1図Cのようになる。貝層の下層を掘り下げるとローム層上に炉址が発見され、この床面直上に「死後そのまま放置された」人骨が2体発見された。それにとまって出土したのは堀之内2式の注口土器である。さらにそれ



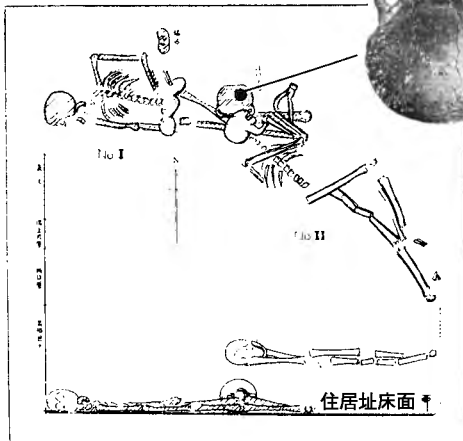
A 調査地点位置図



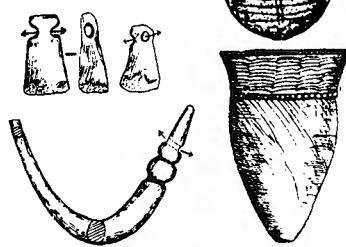
土偶出土状況



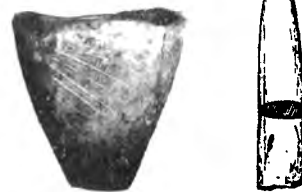
人骨出土状況



混土貝層



純貝層



黒褐色土



第1図 大山史前学研究所による調査地点と概要 (大山 1937より作成)

を覆う土層からは同じく堀之内2式終末の深鉢が出土している。

貝層は2枚に区分されていて、その中でも下部の貝層中からは加曽利B2式の粗製深鉢が、さらに上層からは加曽利B3式から安行1式に比定できる粗製深鉢が出土した。このように層位的に出土した遺物を検討してみると、堀之内2式から加曽利B3式あるいは安行1式期までの層が順序よく堆積している状況がわかる。

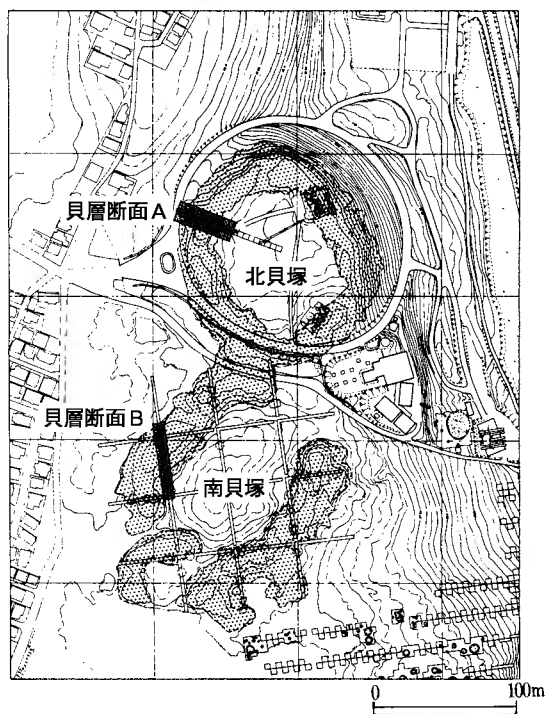
大山はこうした南貝塚の各地点の様相をまとめた中で、「何故かくも連鎖状に貝の堆積がおこなわれるのか」という問題を提起し、「もしこれが堤防様の意義に、故意に集積せられるものとするれば、甚だ面白いのであるが調査の結果からすると、BO点に於ける炉跡、柱穴等よりして、ここにも住居跡を見るから、一概に最初から環状内部に住居して、外圏に貝を投棄したとは申し得ない。少なくとも或る時期には、環状上に住居したものと見ねばならない」とした(大山前掲)。

貝塚内集落説は加曽利貝塚の研究の歴史上において、すでにこの時点でやや複雑な実態をもつことが指摘されていたはずであった。

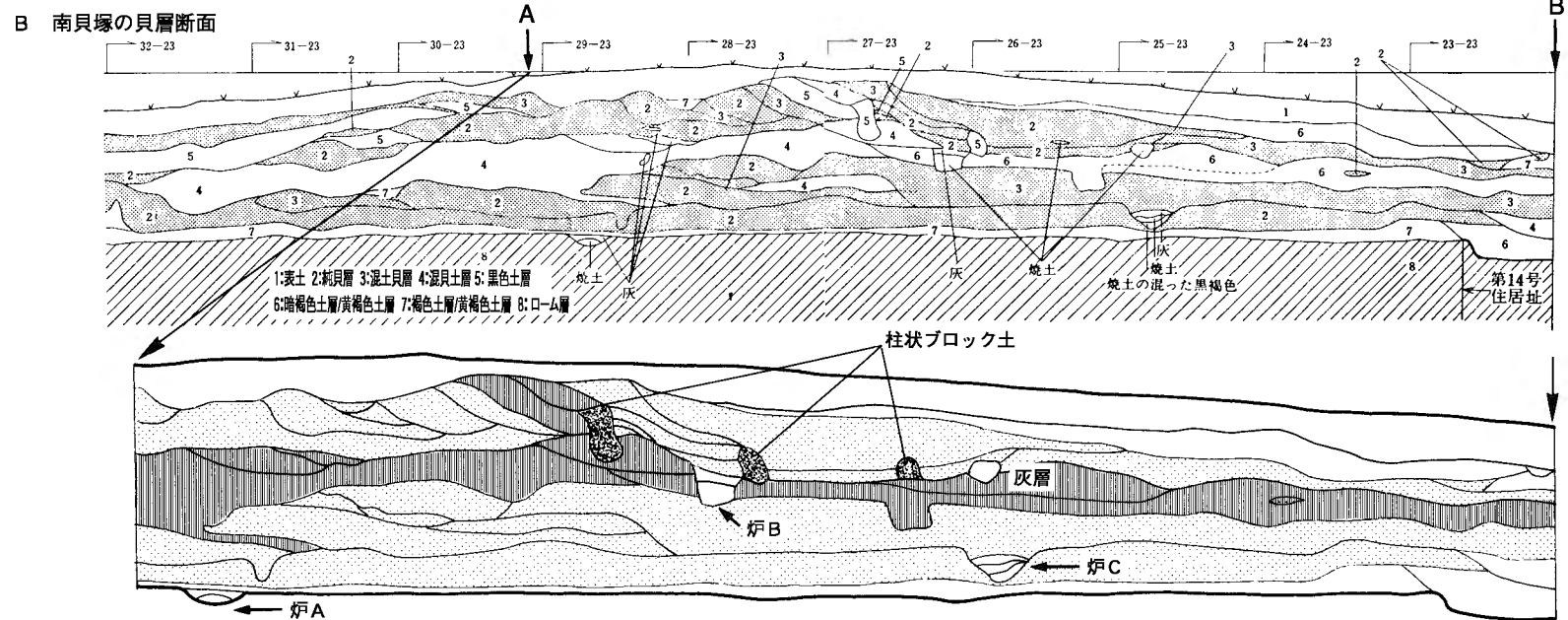
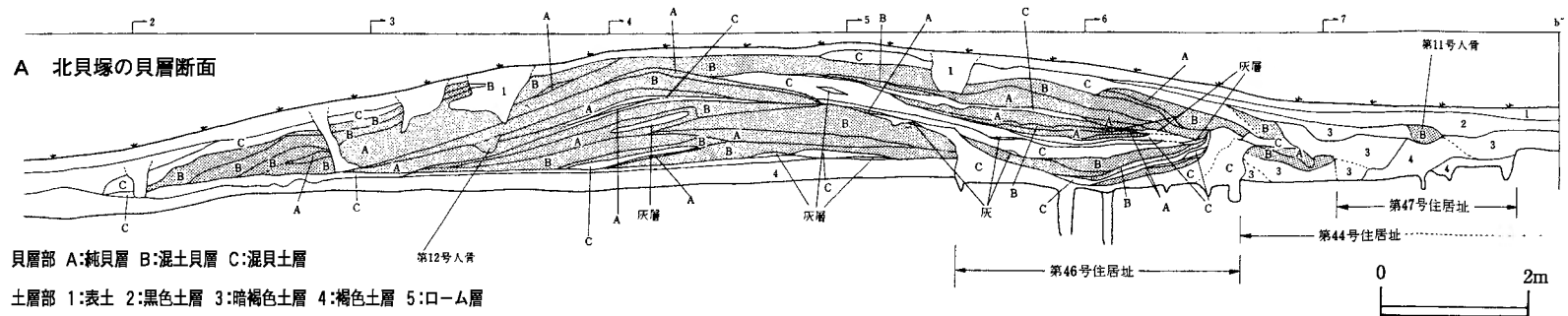
2 北貝塚と南貝塚の異同

1969年に実施された合同調査の成果と、1991年の屋外展示施設の設置にともなうトレンチ再調査の状況から南貝塚の堆積構造をみると、まず北貝塚では純貝層の堆積が顕著であるのに対して、南貝塚には特にその高まり部分を中心に、混貝土層や土層の堆積が顕著であることが指摘できる(第3図)。混貝土層は貝と土の混土率によって区分されるが、土壌の多くは先史地表面の表層土の混入によっているらしく、屋外展示施設の展示断面で観察してもローム層など地山を深く掘り込んだ土砂の混入は認められない。

また混貝土層は混土率が高いもので、土層の上下に接して堆積した貝層が自然営為の攪拌作用で混入したか、あるいは先史地表面に散乱した貝と土砂が人為的に再堆積したものと考えられる。いずれにせよ、こうした層は貝の廃棄という一回性の行為を



第2図 加曽利貝塚貝層断面位置図



C 南貝塚における貝層中の遺構

第3図 加曾利北貝塚と南貝塚の貝層堆積状況

単純に繰り返した痕跡とはいえない。北貝塚の貝層堆積との間に認められる1つ目の違いはここにある。

第2は貝層の堆積開始当初の先史地表面の状況である。北貝塚では竪穴住居の窪地に貝の投棄が開始され、それがやがて周囲へと拡大して最終的な高まりを形成している。北貝塚では小粒の巻貝であるキサゴの純貝層があり、おおくは一回性の堆積状況をよく示していることから、こうした堆積層がふたたび掘り返されたり、土層によって覆われるという経過をたどるものが少なかった事情を示している。

そして第3は貝層の堆積の単位である。北貝塚ではその多くがレンズ状の小単位からなる部分が多いが、南貝塚の堆積単位は特に下層において大きいものが目立つ。問題は貝層を区分する調査者の目的意識如何によるが、それは見た目でも比較的是っきりと追認できる。こうした両者の違いは中期と後期における採貝活動の特性（樋泉1999）だけではなく、むしろ遺跡構造の違いとして説明されるべき現象でもある。

貝層の堆積によって地表面が盛り上がる文字通りの貝塚の堆積構造は、中期の北貝塚と後期の南貝塚では似て非なるものであった。とくに後期の南貝塚における貝層中に発見された堀之内式期以降の生活痕跡がその差異を際立たせている要因となっているのである。

それでは、後期中葉以降の集落構造と貝層中の生活面はどのように関係するのだろうか。

3 南貝塚の形成過程と後晩期集落の構造

1964年におこなわれた加曽利南貝塚の大規模なトレンチ調査の報告において、清水潤三は南貝塚の貝層下に多数の住居が発見されたことを指摘するとともに、「また貝層を掘りとった竪穴の断面らしきものが無数に認められ、その側壁の上面が貝層中にあると見るべきものが少なくなかった点を指摘」した（清水1976）。「しかし断面図の作成者が一定せず」「後日検討してみると竪穴の側壁と覚しき線があまり明瞭に記録されていない場合があるのを遺憾とする」とも述べ、貝層と遺構形成にかかわる記録化が必ずしも万全ではなかったことが推測できる（清水前掲）。しかし、「貝層を掘りとった竪穴の断面」が「無数に認められた」という事実だけをもってしても北貝塚との違いは十分に理解することができるであろう。

(1) 出土遺物の年代からみた堆積過程

南貝塚のこれまでの調査では各層のおおよその時期が遺物の判定によって明らかにされている。しかし、貝塚の形成過程を復元するためにはなるべく細別の土器型式によって時期決定を行う必要がある。さいわい、第IVトレンチの断面図と出土した遺物の再報告がおこなわれているので、その成果を検討しながら堆積過程を復元してみよう（村田1999）。

発掘は25mにおよぶトレンチを2mのグリッドで区切り、それを単位にして層位的に遺物の取り上げがおこなわれているが、各グリッドでほぼ共通して確認できた事実が一番下の層か

ら出土した土器と表土直下の層から出土した土器とでは明らかな年代差が認められることである。この事実は現地表に認められる顕著な貝塚の起伏は、長期的な累積の結果であることを何よりも良く物語っている。本トレンチでは最下層において加曾利E 4式から後期初頭の称名寺I式、同II式が出土しているが、図化されたものによる限りそれも出土量は地点により異なっているらしい。中間土層と上部貝層から出土したのは膨大な量の加曾利B式から安行1式土器であった。最上層からは晩期初頭の安行3a式土器が出土する部分もあるが、それは土層であり、貝層の多くは安行1式の出土をもって堆積が終了している。

したがって、すでにこれまでも指摘されてきたことではあるが、南貝塚での貝層形成は後期前葉から後期後葉とすることができる。こうして遺物を検討してみると、グリッドの上下では大山柏らの調査状況と同様にして層堆積の年代差が明確に指摘できる。しかし、同様の視点で今度は水平方向に検討を進めると、土層断面図に示された層の堆積とそこから出土した土器の年代は、特に貝層中にある土層や混貝土層において整合を欠くことが指摘できる。こうした現象が一番顕著な時期は堀之内1式期から加曾利B 3式期である。

これを調査方法上の不備として指摘することも可能かもしれないが、収納された袋単位に土器を見ると意外に型式の混入が少ない部分もある。先の清水の指摘をふまえつつ、残された記録を生産的に利用するならば、それは先述した土質の多い層のやや複雑な堆積過程に由来すると考えるべきではないだろうか。貝の混入の度合いによって堆積層を基本的に区分するという分層方法のなかで、おそらく土質の多い層、または土層そのものの分層が十分に徹底できていなかったのかもしれない（注3）。そうであるならば、後期前葉から中葉の時期にかけて、貝層形成過程の途上で貝の投棄とは別の行為が行われた可能性が浮上してくる。

(2) 貝層断面に見られる落ち込みと「柱状ブロック土」の成因

報告されたトレンチの断面でこうした状況を予測させる場所を検討してみよう（第3図B）。29-23Gから23-23Gにかけての長さ約12mの範囲では、炉跡の断面が貝層下面（炉A）と下部貝層中（炉B）および上部貝層下面（炉C）の3箇所認められ、清水の指摘を裏付ける状況が確認できる。しかも下部の貝層は平坦で堆積規模が大きいものに対して、中間土層を挟んだ上部の貝層は小規模な単位を成し、両者の層相は好対照である。上部貝層の下面はなだらかに立ち上がり、その上に小規模な貝層が連続して堆積している状況がわかる。この土層断面はあたかも竪穴住居を埋めるかのような堆積構造が見られ、その下面にはピット状の掘り込みもある。

さらに注意すべき点は、掘り窪められた底面を穿つように、または底面から立ち上がるかのように柱状の土層がこの窪地内で3箇所確認できることである（第3図C）。とくに東側の2箇所の「柱状ブロック土」は、この掘り込みの端をあたかも区切るかのように存在し、一部で窪地内に流入する貝層の堆積を干渉している状況が観察できる。このことはこの土壌または、

その起源となる物が貝層の堆積する以前にすでに存在していたことを傍証するであろう。貝層堆積後の局所的な攪乱の可能性も疑ってみたが、その位置は明らかにこの窪地部分に対応しており、さらに上層から貫入した痕跡は残された断面図には見られない。したがって「柱状ブロック土」は、予測にとどまるが柱材の腐朽した土壌などの構造物の痕跡である可能性を考えておきたい。また同図Aに示した北貝塚の貝層断面には竪穴住居（第46号住居址）が古い貝層を切り込んで構築されているが、その壁の付近と外部に土層が堆積している状況を確認することができる。これは住居の壁体か周堤の一部である可能性が高いが、南貝塚の貝層上の遺構断面にも類似する土層堆積が認められるのは単なる偶然ではないだろう（第3図B）。

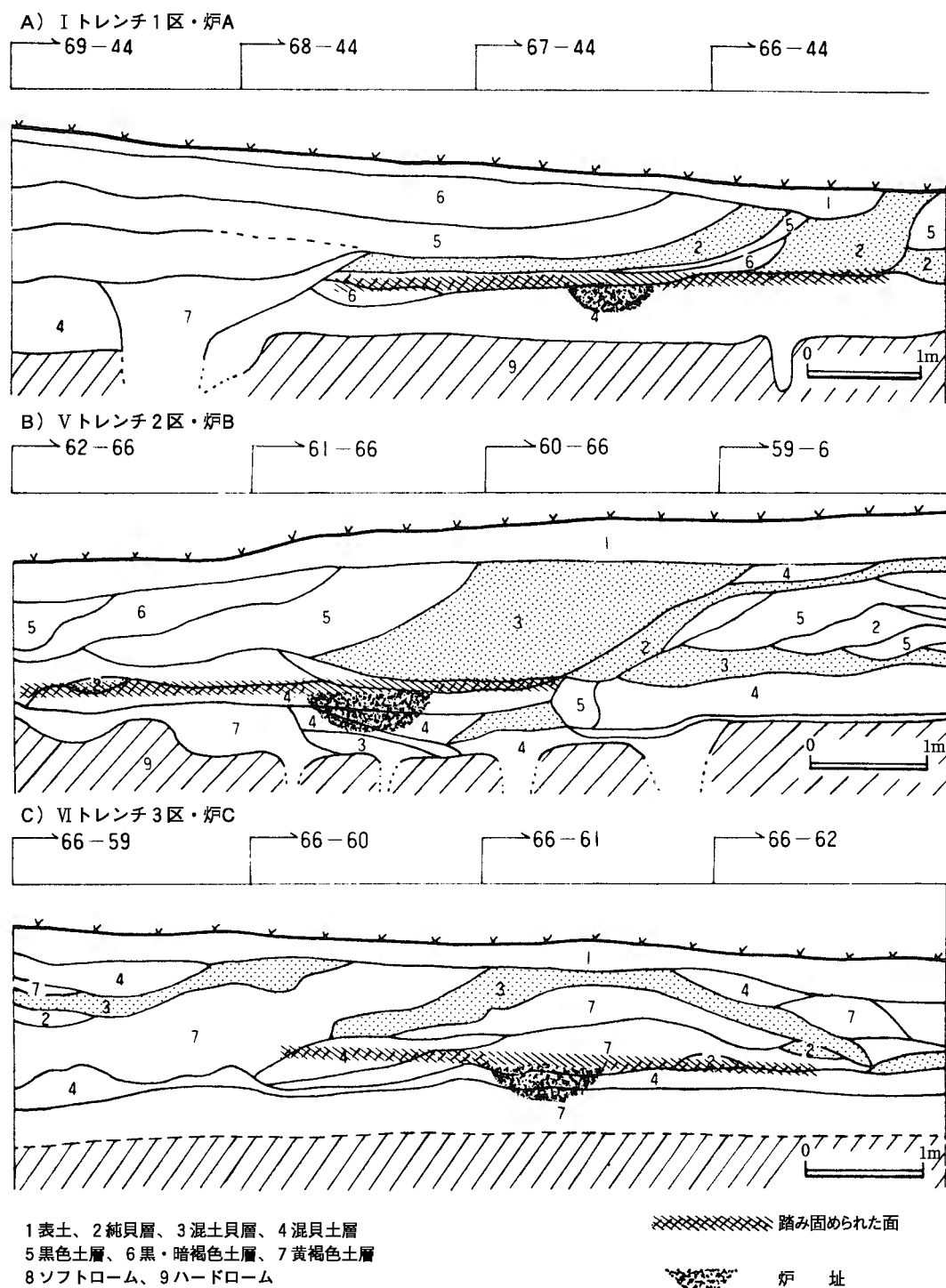
ちょうど筆者も屋外貝層展示施設を作る際に偶然にもこの部分の再発掘に参加する機会に恵まれ、そのときに約50cmの幅を拡張したこの部分の断面を観察することができた。貝層は複雑な様相を呈するものの、当時のセクション図と大略同じ構造の断面を確認することができた。貝層は地表面に併行して水平に堆積する薄層が連続する部分と、窪地内にはあたかも一度堆積した貝層が掘り返されて巻き上げられたかのような複雑な堆積角度を示す部分などもあった。そしてまた柱状ブロック土も確認できたが、その土層は暗褐色や黒色を呈した土壌であったと記憶している。またすでに指摘したように、こうした土壌が表土から貫入する状況は観察できず、その成因について当時は疑問に思った記憶がまだ筆者の記憶に新しい。

今のところこうした貝層中における掘りこみ部分に明瞭な形で炉跡が伴って発見された場所はない。しかし、両者は同じ貝塚の高まりの中に水平に堆積した土層や貝層を面として構築されていることから、本来は掘り込みを持つ住居の一部分であった可能性は高い。

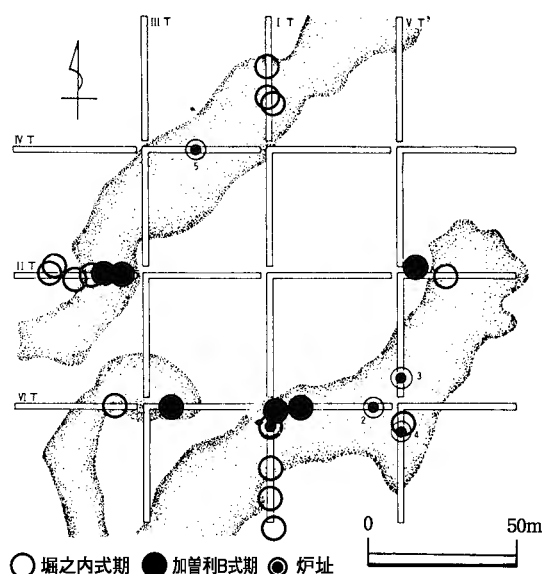
(3) 貝層中に発見された焚き火跡

南貝塚の発掘に参加した庄司克氏は調査トレンチの内部や断面において興味深い炉跡状の遺構の存在を指摘している（庄司1969）。庄司氏によれば、それは「まぎれもなく貝層部に存在し、貝層の上面が焼けただれていた」。そして炉跡は水平な貝層の上部においてのみ検出され、その周囲には踏み固められた面があり、ここから完形の土器などの遺物がまとまって出土した地点もあったという。さらに「柱穴などのピット群が未検出な点を除けば住居内における床面と炉跡のような状態」であったと報告している。あわただしい調査のなかで庄司氏の観察できた炉跡は5基であり、そのうちで報告された3基の遺構の時期は堀之内1式期が1基、加曽利B3式～安行1式期のものが2基であった（第4図）。さらにこれ以外にも記録は残されていないが、10箇所以上の同種の炉跡の発見があったという（庄司前掲）。

南貝塚の貝層は「捨て灰や土層などの間層が複雑に入り込み、同じトレンチ内でさえも僅か2mしか離れていない西壁セクションと東壁セクションの層序がまったく異なった状況を示すということも珍しくはなかった」が、その反面で一番下の貝層は水平な堆積を示し、その上面においてこの炉跡が発見されたのである（第4図）。



第 4 図 南貝塚貝層中に発見された炉址断面（庄司1969に加筆）



第5図 後期の住居と貝層中炉址の分布状況

図示された3箇所の炉跡を検討してみると炉Aはレンズ状堆積を示す土層や貝層の下面に混土貝層上を水平にならして床面が形成されているほか、その面は立ち上がりをもつことがわかる。炉Bも角度は緩やかではあるが、立ち上がりをもつ窪みの下面に硬化面と炉跡が検出されている。炉と床面上の堆積状況が異なるのは炉Cである。炉Cは混貝土層を床面としているが、その上には土層や貝層が、あたかもこの遺構を埋めつくすかのようにレンズ状に盛り上がった堆積を示している。これら貝層中の遺構は幾分堆積状況が異なるが、貝層であれ土層であれ、いずれも人為的な堆積層によって埋められていることは共通している。

庄司氏が確認した遺構の場所を報告書で公表された土層断面と比較してみると、図にはその痕跡さえ記録されていないので、同種の遺構が他の地点においても存在した可能性は高いとみられるべきかもしれない。先述した清水の所見は、正式報告より早い時期にすでに庄司氏によってその一部が紹介されていたことになる。庄司氏の注意に上った炉跡の時期は堀之内1式期から安行1式期である。この時期の堆積層が他に比べて複雑な様相をもつという事実についてはすでに述べた。加曾利南貝塚の複雑な土層堆積と遺物が混在した要因として炉を伴う構造物の構築が第一の候補として想定されよう。そしてその炉跡の分布を見ると、それは貝塚のなかの1ヶ所に集中するのではなく、むしろ環状を呈するかのように各所に分布している状況が想定される（第5図）。かつて大山柏が調査したB-0地点では同種の炉跡に伴う柱穴を検出している。大山はこれを根拠にして貝層中に住居が存在することを指摘したが、庄司氏の報告した遺構と大山の指摘は本来同じ性格の遺構である可能性が高い。

(4) 加曾利南貝塚の形成と後晩期集落の構造

これまでに残された調査所見の検討で、加曾利南貝塚における高まりをもつ貝層の堆積構造が、単なる貝や土器などの不要物の廃棄によったのではなく、その内部に住居と考えられる遺構が繰り返し構築されていたことがわかってきた。そしてその時期は後期前葉の堀之内1式期から加曾利B式期を経て安行1式期を中心としている。

1964年におこなわれた南貝塚の調査で検出された竪穴住居は32軒である（後藤1976）。その内訳を第1表に示した。時期別の住居軒数は堀之内式期の13軒をピークに加曾利B式期では6

軒、安行 1～2 式期で 1 軒、安行 3 b 式期 1 軒という推移を示す。この時期別の住居数の推移は後期から晩期にかけて継続する下総台地の集落遺跡にほぼ共通して当てはまる特徴をもつ。

しかし、この推移が本当に居住単位の数的変遷を示すのかという点に関しては、これまでの検討でみたように疑問が残るのである。すなわち、加曽利 B 式期以降の居住施設が貝層上面に構築されていたとするわたしの推測が事実であるなら

ば、加曽利 B 式期から安行式期の居住単位は本来もっと多く存在していたことになるからだ。

こうした実態がこれまで見えにくかったのは、多くの縄文集落研究が関東ローム層を掘り込んだ堅穴住居址の発見に認識の基点を置いた議論を営々と続けてきたからであり、問題はあまりにも単純化された研究者の発掘調査方法と問題意識の内にあったことになる。加曽利貝塚のような環状を呈する大型貝塚の場合は、外側から内側に向かい居住施設の時期が新しくなるという傾向が指摘されてきた（後藤 1980 など）。実際に松戸市貝の花貝塚では中央部から晩期の遺物がまとも出土している事実もあり、後期から晩期という長期的な変遷の上での特徴を捉えた重要な指摘といえる（八幡ほか 1973）。しかし、加曽利 B 式期から安行 3 b 式期にかけての住居はこうした中央部分にも少ない。むしろこの時期の居住施設は中期終末から後期前葉の住居や生活面を埋めるようにして堆積した土層や貝層上に構築されたものが相当数あったのだろう。

この時期の住居は千葉県佐倉市井野長割遺跡や長野県明科町北村遺跡の住居床面などから出土した「スノコ状繊維製品」や板材などを敷設することによって、平坦で安定した床面を作り出していたことがわかっている（第 6 図）。もはや地面を深く掘りこんで関東ローム層を強く踏み固めて床面とする必要もなかったのだろう。こうした施設構造の変化を伴いながら、この時期の居住施設は環状の高まり部分を中心に占地していたと考えるべきであろう。

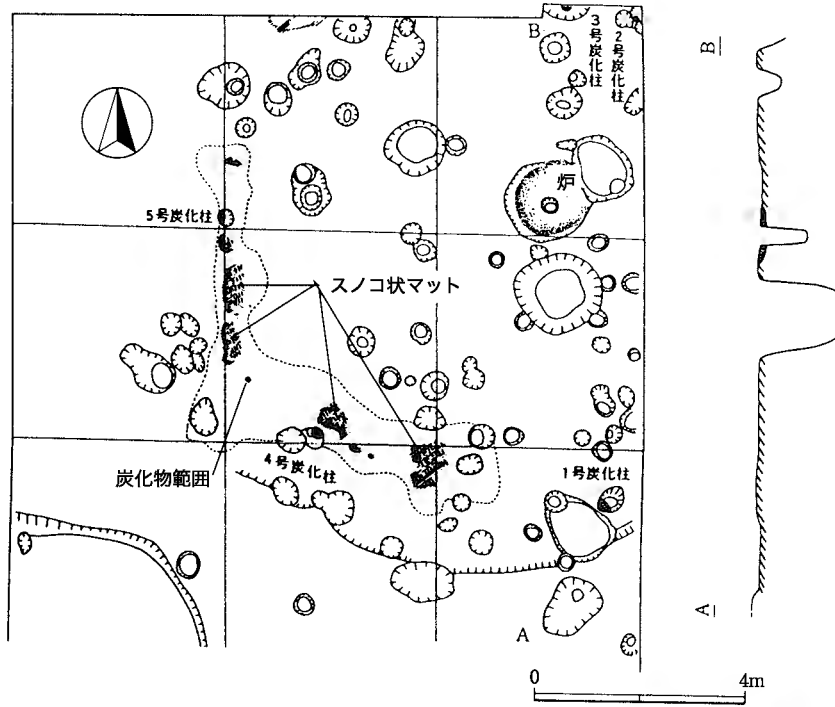
4 環状貝塚と「環状盛土遺構」との関係

一見してよく似ている加曽利北貝塚と南貝塚は、その形成過程に異なる要因がはたらいていた。とくに南貝塚の貝層堆積は、同一地点における貝の廃棄活動という点では断続的であるようだ。そしてこの断続は生業の季節性に依拠した採貝活動の変動によるものだけではなく、生活面の構築という、遺跡形成の中ではやや時間的な厚みのある活動をおもな要因としたもの

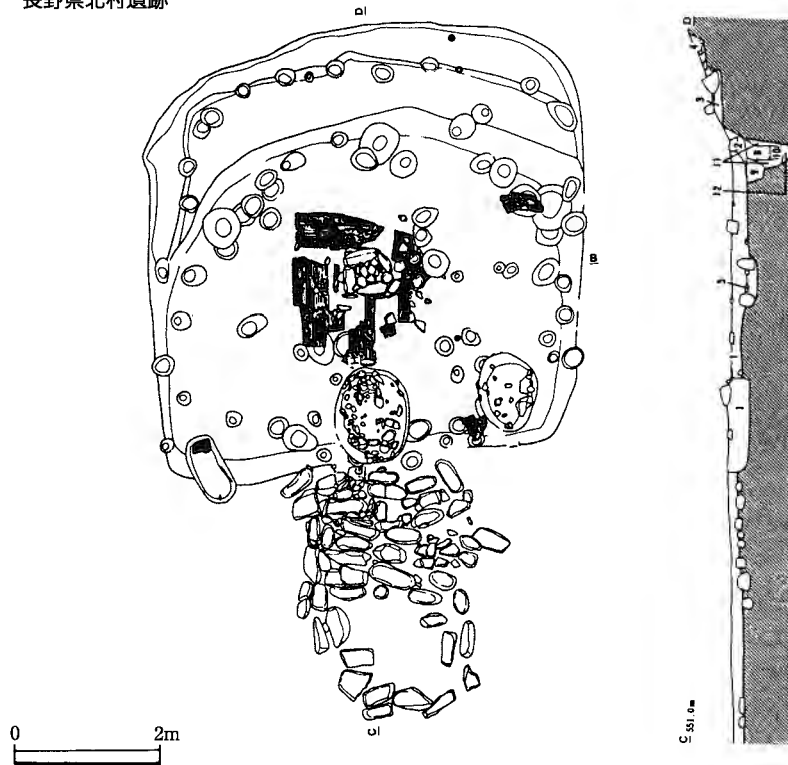
第 1 表 加曽利南貝塚の時期別住居数（後藤 1976）

所属時期（％）		戸数（％）	住居址No
中 8 (25.0)	阿 玉 台 式	4 (12.5)	17, 22, 23, 25
	加 曽 利 E 式	4 (12.5)	5, 19, 31, 32
後 期 22 (68.8)	称 名 寺 式	2 (6.3)	27, 29
	堀 之 内 式	13 (40.6)	1～3, 6～12, 16, 21, 26
	加 曽 利 B 式	6 (18.8)	4, 13～15, 28, 30
晩 期	安行 I・II 式	1 (3.1)	20
	安行 III b 式	1 (3.1)	24
時 期 不 明		1 (3.1)	18
計		32 (100.0)	

A



B



第6図 後期住居の床面における敷設物の検出状況

だった。

小論での検討で、すくなくとも後期中葉から末葉の時期にかけて、主な居住施設は、それまでに堆積した貝層によって、地形の高まりの強調された環状の空間に構築されたことが指摘できた。だから、これまでの貝層の外縁部分などの調査によって、この時期の住居跡などが見つからないか、きわめて希薄な発見にとどまっていたのは、貝塚と集落形成が空間的に重複した結果であると考えるべきであろう。

これまで、中期終末から形成が始まり、晩期の中葉で終焉を迎える下総台地の多くの大貝塚に、ほぼ共通して指摘されてきた加曽利B式期以降の住居跡の検出軒数の極端な減少傾向は、貝層中における炉址や床面、柱穴の検出事例を積極的に評価することによって、これまでの矛盾を整合的に説明できるであろう。それとともに、貝層などの人為堆積層の上に建てられた構築物が、地面をほとんど掘りこまないか、浅い掘り込みしかもたない構造を併せ持つ点にも注意したい。

遺跡の広い範囲が発掘された後期から晩期の時期の竪穴住居の検出例を検討してみると、大半が傾斜面に立地しているものであるというひとつの傾向が指摘できる。これは傾斜した地面に平坦な床面を確保するために高い部分を掘削した結果、必然的にローム層に床面を作ることになったものである。特に竪穴住居の床面積がそれまでに比べて大きくなる加曽利B式期以降には、平坦な広い床面積を確保するのは建築技術上で容易なことではなかったに違いない。

加曽利南貝塚では、すくなくとも後期中葉以降の高まり部分には、すでに貝層の形成が開始されている。この部分に生活面を構築するためには、不安定な貝層の高まり部分を削るか、土を敷いて平らな面を作り出すかのいずれかであっただろう。こうした人為層の堆積がつづく一方で、彼らの恒久的な居住施設がこの空間に重複して作られたのである。庄司氏が「まるで竪穴住居の床を掘り出すように、この破碎貝層の上面を掘り出すことができた」のは、われわれの拙い憶測の外に作られた住居の床面だったのであろう。また、緩い傾斜面をつくる場所では、伝統的に地面を掘り下げた竪穴式の住居も依然として作られ続けた。すくなくとも壁柱穴構造が確立した後期中葉以降において、両者は地形面の状況の違いに応じて選択された住居建築技術の選択肢に過ぎなかったのだろう。

こうしてみた場合、近年内陸部を中心に発見されている「環状盛土遺構」と環状貝塚との関連性が重要な問題として浮上することになる。「盛土遺構」は人為的に土砂が環状に積み上げられたと考えられている遺構である。しかし、その外観のみからこれを縄文人の大土木工事の結果と考え、祭祀スタジアムと評する意見にわたしはこれまで批判的な立場をとり続けてきた(阿部1993)。わたしは「環状盛土遺構」とは、谷頭を取り囲むようにして形成された集落遺跡であり、これまでの認識過程の差異を明確化するために「谷奥型遺丘集落」と呼んでいるものである(阿部1996、2002、阿部他2004、阿部2004a)。「盛土」という言葉の原義と遺跡として

の「盛土遺構」の実態が整合しない以上、学術用語としては妥当ではないことは明白である。

そして谷奥型遺丘集落にも加曽利南貝塚と同様に環状の高まり部分に厚い遺物包含層が堆積しており、その中に地点貝塚や居住遺構が構築されていることは両者の共通点でもある。つまり、環状貝塚が後晩期の集落であるのと同様にして、「環状盛土遺構」は内陸部での後晩期集落の特徴を保持しているのである。

この問題にいち早く注目したのは千葉県佐倉市吉見台遺跡を調査した藤村東男氏である。藤村氏は内陸部にある吉見台遺跡の特徴を「中央部には遺構がなく、周囲の高みにのみ住居址などが発見される点は、東京湾周辺の大形馬蹄形貝塚と共通するものであり、両者には遺跡形成にあたっての関連性が感じられる」としたのである（近森・藤村ほか1983）。さらに堀越正行氏は「中央窪地型集落」という概念を定義しながら「環状盛土遺構」と環状貝塚の類似性を指摘し（堀越1995）、江原英氏は「環状盛土遺構」の集成と類似遺構として環状貝塚を掲げている（江原2001）。

これらの指摘と小論で論じた貝層上面における住居構築の問題は密接にかかわる問題でもある。後晩期の集落遺構が見えなくなるとされてきたこれまでの認識は、住居が構築される空間に人為的な堆積層が形成され、住居の多くが貝層や黒色土中に構築されたことによって、黒色や褐色といった土壌の色調の違いを手がかりにした伝統的で経験的な発掘調査の方法では発見が困難であったのだ。

谷奥型遺丘集落がなぜ盛り上がるのかという問題は、この議論の最後に残されたむずかしい問題であるが、今日でも視認できる地表面の盛り上がり祭祀スタジアムと考える意見は、それが「大土木工事」であるという意見で一致している（勅使河原1995、小林1999）。しかし、かつて筆者が寺野東遺跡で指摘した土器型式による年代幅は、加曽利南貝塚においても同様にして確認できた事実であるから、高まりが一時に出来た（作られた）という解釈は発掘調査によって明らかになった事実を説明できる結論ではない。

そしてこれらの堆積層を見るならば、土器や石器などの大量の遺物や捨て灰や焼土など、さらには貝塚の場合には貝類や獣骨などの生活残滓が多量に含まれる層と遺物の少ない層が互層構造を成している特徴が指摘できる。

不要となった住居などの諸施設の窪地に不要な残滓を投棄する行為は千葉県西之城貝塚などにみられるように貝塚形成の初期から見られる行為である。その上に重ねて生活面を形成するという行為はまだ初期の貝塚には認められないが、長期定住型集落の確立した中期にその片鱗を見ることができる。それは加曽利北貝塚の中期の貝層断面においても指摘することができるのであるが（第3図A）、北貝塚の場合は貝の廃棄前の連続した住居の重複は認められるものの、貝層上における連続性に乏しいという違いがある。

わたしは遺丘が形成される要因のひとつとして、土壁家屋の成立と共に残滓の廃棄面を土壌

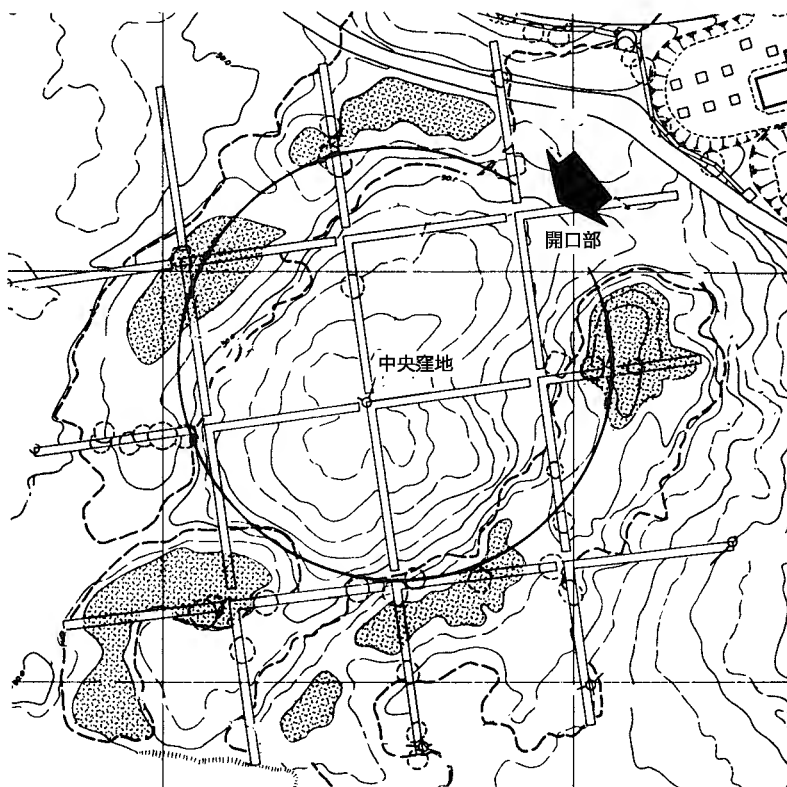
で覆い新たな生活面をその上に更新するという行為が連続的に介在した可能性を指摘したい。その背景には、居住空間の構成にかかわる厳密な規制が作用していた可能性が高い。さらに「環状盛土遺構」とは土手が環状に連なるのではなくて、マウンド状の高まりが環状に配列されるのが実態であるとかつて指摘したことがあるが（阿部1996）、近年「環状盛土遺構」として注目されている千葉県佐倉市井野長割遺跡もそうした状況が良く残されており、マウンド状の高まりは現存するだけで5箇所、すでに破壊された部分を推定すると6箇所が直径100mの円の軌道上に位置する状況が確認できる（第7図B）。問題となるのはこうした1つのマウンド内の生活面の累積状態であろう。マウンドが継続的な居住活動の単位を示す可能性が高いとわたしは考えているが、同じ方法で加曽利南貝塚の貝層を比較すると興味深いことがわかる。まず貝層分布を示す等高線の中で閉塞した等高線によって区分できる独立した高まりをマウンドとして見立ててみると、120mほどの正円の軌道上に6箇所の高まりのうち4箇所までが位置する状況が指摘できる（第7図B）。他の2箇所もこの軌道に近接している点からみても貝層の高まりは環状の配置をとることが指摘できる。

しかも井野長割遺跡では谷に面した1箇所に開口部があり（第7図B矢印部分）、この斜面には厚い遺物包含層が堆積していることが明らかにされた（戸谷2004）。加曽利南貝塚も東側の谷に面する部分に貝層の見られない開口部が存在するのは立地する台地の形態が異なるにもかかわらず、遺跡の累積形態上で注目される事実である（第7図A矢印部分）。

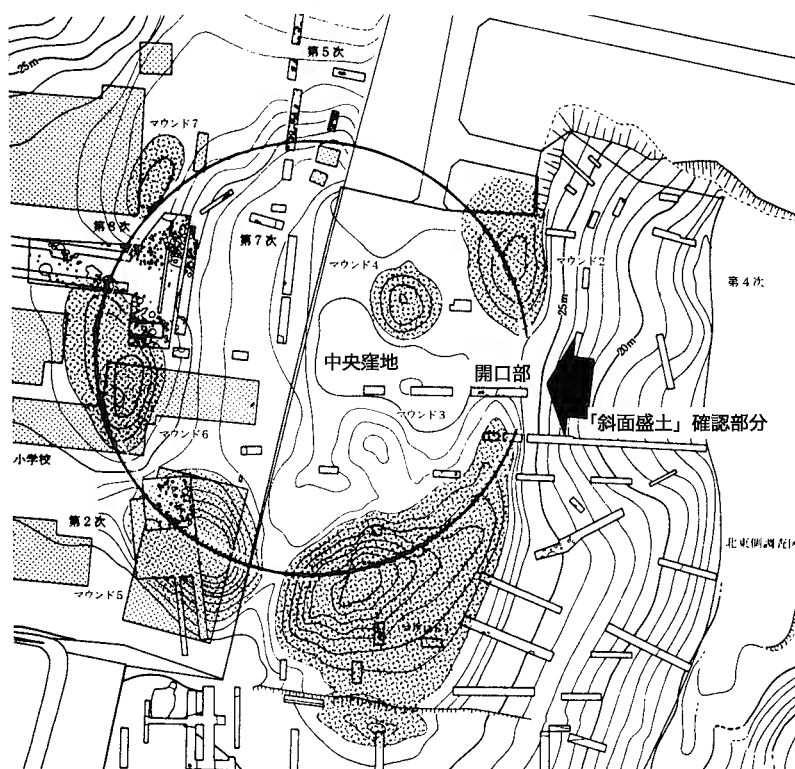
一方で加曽利南貝塚の中央窪地や広場とよばれる中央部分は「ソフトロームが薄く」、「発掘を行うとじきにハードロームが現れ」、「人工が加わった疑いがある」という（清水1976）。たしかに貝層中には遺構面にかかわる土層の堆積が顕著であったが、それらはいずれも黒色や褐色土の先史表層土であり、基盤の関東ローム層ではない。しかも下総台地には遺跡のない場所に窪地のある自然地形が存在するという指摘もある（堀越1995）。このことは中央窪地の成因を「盛土」の高まりを作るための大土木工事という行為で説明する考えと矛盾する（注4）。わたしたちが今日見る加曽利南貝塚の地表面の高まりは、住居の構築のための先史表層土の移動と、空隙率の高い貝層の堆積という両者が関係している可能性が高いだろう。

わたしは近年、遺丘集落には環状構成のもの（谷奥型環状遺丘集落）と谷面に並列するもの（谷面並列型遺丘集落）の2つの類型があることを指摘した（阿部2004a）。小論では谷奥型環状遺丘集落という集落類型の概念が、環状貝塚にも共通する構造的性を有することを確認し、馬蹄形あるいは環状貝塚と集落の関係を論ずる場合、今日なお保守される「貝塚内集落説」に対して、後期前葉から後葉の時期にかけて「高まり貝層上集落説」が成り立つ可能性について検討した。

小論を終えるにあたり、今後の課題として明記しておくべきことがある。1つは後晩期の集落のいくつかが環状構成をとることの要因である。中期終末から後期前葉において、貝塚形成



A 加曾利南貝塚



B 井野長割遺跡

第7図 加曾利南貝塚と「環状盛土遺構」の高まりの規模と配置 (トーンは独立した高まりの範囲を示す)

の衰退とともに拡散した集落が、ふたたび高まり部分に占地して環状になることの歴史的な経緯を、これまでの「住居址配置論」とでもいうべき集落研究とは距離をおいて検討する必要がある。

第2の課題は最も根本的で重要な問題であるが、集落という性格を単なる住居跡の有無だけに頼らないで、出土遺物などを多面的に検討する中で居住にかかわる生業活動の実態を明らかにする方法論の開拓である。この点については、すでに生業研究を展望する中で指摘したことがある（阿部1955）。とくにこれに付随して、「住居址」の認識にかかわる遺跡調査法についても一考を要するであろう。

あとがき

加曽利南貝塚の屋外展示施設をつくるために、かつて早稲田、明治、慶応義塾の3大学が中心となって発掘した南貝塚の大トレンチの一部分が、40年の歳月を経て再び姿をあらわした。わたしは学生時代その場に居合わせ、身の丈を超える厚い貝層を断面から調査できたそのときの経験と所見が今回の立論の基点となっている。そのときに貝層の断面に見えた複雑な層相や、堆積順位、妙に土の多い水平堆積の混貝土層などの組み合わせが、北貝塚の中期の貝層とかなり異なるという当時のわたしの印象は、今日から見れば中期と後期の集落構造の違いと認識すべきものであった。しかし、それより60年以上も昔に、南貝塚の貝層中における住居跡の発見から「堆積堤」の構造について考察した大山柏の見解が、今日的になお多くの示唆を与えるものであることはことさらに重要であり、加曽利貝塚の研究史の中に明記しておくべきことと思われる。

最後に南貝塚の発掘当時に後藤和民氏と庄司克氏からは、多大なる御教示をいただいたことを明記するとともに、今回拙論の発表の機会をいただいた千葉市加曽利貝塚博物館の村田六郎太、菊池健一、横田正美の諸氏に心から感謝申し上げたい。

（明治大学文学部）

注

注1：本論で用いる「黒色土」という用語は関東ローム層（赤土）に対して用いるもので、あくまでも便宜的な用法である。

注2：田中英世氏は加曽利貝塚周辺の小規模調査を整理しながら、本来の加曽利貝塚のひろがりとは指定範囲外の西北方向に拡大する重要事実を指摘している（田中1996）。この地点に検出された遺構は中期終末から後期初頭に限定されるようで、規模の大きな貝層の形成は見られない。

注3：南貝塚の報告書（後藤ほか1976）の貝層断面図と村田氏により紹介された出土遺物の状

況を示すセクション図には細部に違いが認められ、報告書ではやや混乱した土層断面を一部で修正して報告したことがわかる。

注4：筆者は谷奥型環状遺丘集落の中央窪地は本来旧地形としての溺れ谷であることを表面土壌の色調分布や露頭断面の観察から指摘した（阿部ほか2004）。

引用・参考文献

- 阿部芳郎 1995 「縄文時代の生業～生産組織と社会構～」『展望考古学』考古学研究会
阿部芳郎 1996 「縄文のムラと「環状盛土遺構」」歴史手帖第24巻8号
阿部芳郎ほか 2001 「佐倉市草刈堀込遺跡と縄文後晩期の集落景観」『貝塚博物館紀要』28号
阿部芳郎 2003 「遺跡群と生業活動からみた縄文後期の地域社会」『縄文社会を探る』学生社
阿部芳郎ほか 2004 「縄文時代後晩期における谷奥型遺丘集落の研究」駿台史学第122号
阿部芳郎 2004a 「縄文後晩期の集落構造と「盛土遺構」」『井野長割遺跡を考える』
阿部芳郎 2004b 『失われた史前学』岩波書店
江原 英 2001 「環状貝塚・環状盛土遺構」『縄文時代集落の現段階』縄文時代文化研究会
大山 柏ほか 1937 「千葉県千葉郡都賀村加曾利貝塚調査報告」『史前学雑誌』第9巻第1号
後藤和民 1970 「加曾利北貝塚の貝層堆積」『加曾利貝塚』Ⅲ 千葉市立加曾利貝塚博物館
後藤和民 1976 「加曾利南貝塚の住居址」『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
後藤和民 1980 「縄文集落と貝塚」『どるめん』24・25号
小林達雄 1999 『縄文人の文化力』新書館
清水潤三ほか 1974 「井野長割遺跡概報」『佐倉市文化財報告』Ⅰ
清水潤三 1976 「加曾利南貝塚の形成」『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
田中英世 1996 「加曾利西貝塚の調査」『貝塚博物館紀要』第23号
庄司 克 1969 「加曾利南貝塚貝層中発見の炉跡について」『貝塚博物館紀要』第2号
近森 正・藤村宗男ほか 1983 『吉見台遺跡発掘調査概要』佐倉市遺跡調査会
勅使河原彰 1995 「ハレとケの社会交流」『縄文人の時代』新泉社
樋泉岳二 1999 「加曾利貝塚における貝層の研究」『貝層の研究』千葉市立加曾利貝塚博物館
戸谷敦司 2004 『井野長割遺跡（第4次調査）』印旛郡市文化財センター
堀越正行 1995 「中央窪地型馬蹄貝塚の窪地と高まり覚書」『史館』26
村田六郎太 1999 「加曾利南貝塚出土資料土器(1)」『貝層の研究』千葉市立加曾利貝塚博物館